

論文提出者氏名 田中有美

田中有美氏の「アメリカ及び日本現代小説における非ロマン主義的『ドン・キホーテ』受容に関する比較考察」は、アメリカ及び日本の現代小説作家たちが、世界文学における「最初の大小説」（ルカーチ）とも評されるセルバンテスの『ドン・キホーテ』を、それぞれの文学的営為のうちにいかに取り入れたかを跡づけ、『ドン・キホーテ』解釈の方向性について論じた論文である。

本論文は、第一部「アメリカ現代小説における非ロマン主義的『ドン・キホーテ』受容」に収められた三章と、第二部「日本現代小説における非ロマン主義的『ドン・キホーテ』受容」に収められた三章に分かれ、序論と結論を付す。以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

序論に述べられるように、『ドン・キホーテ』は19世紀ドイツのロマン主義者たちによって喜劇ではなく悲劇として読み替えられ、ドン・キホーテは悲劇の英雄とされた。アンソニー・クロースの「『ドン・キホーテ』のロマン主義的解釈」において指摘される、このようなロマン主義的解釈を意識しつつ、田中氏は、滑稽さと風刺性を重視する十七世紀以来の伝統的解釈の文脈にあらためて注意を喚起する。後者は、グロテスク・リアリズムとして読むバフチンの解釈や、残酷さを読み込むナボコフの解釈などに連なる。

「真面目な解釈」と「滑稽な解釈」（フランシス・リコ）を両極とするこのような様々な『ドン・キホーテ』解釈の歴史的な文脈を踏まえつつ、田中氏は、アメリカと日本の現代小説における『ドン・キホーテ』受容の跡を探ろうとする。アメリカと日本は、それぞれヨーロッパに近い外部と遠い外部として位置づけられる。また、批評ではなく創作としての現代小説が『ドン・キホーテ』解釈が跡づけうる場として選択される。

第一部第一章「ヨクナパトーフアのドン・キホーテたち」は、『ドン・キホーテ』を愛読したとされるW・フォークナーの『ドン・キホーテ』理解と、作品における影響の跡を論ずる。フォークナーの『ドン・キホーテ』に関する発言は、悲喜劇性と徳性という二つの要素に集約できる。徳性を維持するには「夢の状態」に身を置くことが重要であるが、現実世界に生きてゆく際には、この「夢の状態」が破られることがあり、そこにドン・キホーテの悲喜劇が生まれるとされるのである。

フォークナーの小説にはキホーテ的キャラクターが現れる。『サートリス』、『サンクチュアリ』に登場するホレス・ベンボウ、『響きと怒り』、『アブサロム、アブサロム！』に登場するクエンティン・コンプソン、『八月の光』、『町』、『館』に登場するギャヴィン・ステューヴンズ等である。ホレスと妹ナーシサの関係は、騎士道物語における騎士と貴婦人の関係の変奏であるとみられるし、執着の対象における理想と現実の齟齬という事態がクエンティンをめぐる物語にあらわれる。また夢と徳性が現実に敗れるさまを体現するのがギャヴィンである。彼らはキホーティズムを受け継ぐ者として造形されているが、その語りには自己批評的視点があり、ロマン主義的ドン・キホーテ像に収まらない部分を含むことが確認される。

第二章「生き続けるドン・キホーテ—ウォーカー・パーシーの『映画狂』と『ドン・キホーテ』」は、ウォーカー・パーシーの『映画狂』の主人公ビングス・ボウリングが、フォークナーのヨクナパトーフア・サーガの主要登場人物であるクエンティン・コンプソンの人物造形を引き継いでいるとの観点から、そのキホーティズム的特徴を論ずる。ビングスをめぐる物語には、繰り返される「探求」、現実と対置される虚構、「家」との距離、女性の存在の希薄さ等が指摘できるが、これらがフォークナーを介しての『ドン・キホーテ』理解と関連づけられる。

第三章「ロマン主義的『ドン・キホーテ』の脱却—ジョン・ケネディ・トゥールの『愚か者

連合』」は、ジョン・ケネディ・トゥールの『愚か者連合』の主人公イグネシウス・ライリーが、ドン・キホーテとの対比において理解できることを論じる。イグネシウスとドン・キホーテに「狂気じみた冒険、大惨事」と「不気味な論理」が共通することを指摘したのはウォーカー・パーシーだが、イグネシアスのふるまいには、バフチンがグロテスク・リアリズムの特質として指摘する物質的・身体的原理が強くあらわれる。それはロマン主義的解釈の文脈のなかで軽視されてきた『ドン・キホーテ』における「笑い」の要素に改めて注意を喚起することにもつながるとされるのである。

第二部第一章「全共闘的ドン・キホーテの復権—矢作俊彦『スズキさんの休息と遍歴—かくも誇らかなるドーシーボーの騎行』」は、日本のマルクス主義的言説において否定的言及の対象であったドン・キホーテに関する歴史的な文脈を確認しつつ、これを強く意識するものとして矢作俊彦の小説を論じる。マルクスとエンゲルスによる『ドイツ・イデオロギー』では、ドン・キホーテとサンチョは、現実を顧みず空言を弄するエゴイストと形容される。これを受けて「サンチョー・パンザ論」や「ドン・キホーテの秘密」を著した花田清輝は、ドン・キホーテを否定的比喩として用いた。これが日本のマルクス主義的言説において一般に流布することになる。全共闘世代のその後を描く矢作の作品は、このようなドン・キホーテの意味づけを反転させているとされるのである。この章の記述は、日本における『ドン・キホーテ』受容の重要な文脈を指摘したものとして、複数の審査委員の強い関心を惹いた。

第二章「冒険小説化する『ドン・キホーテ』—高橋源一郎『ゴーストバスターズ』」は、高橋源一郎の小説を「小説の祖」としての『ドン・キホーテ』受容の一例として論ずる。高橋の小説は『ドン・キホーテ』の世界を縦横に取り込みつつ、小説についての小説として展開するが、理念を喪失した『ドン・キホーテ』は冒険小説に姿を変えろという、ルカーチが指摘する観点を鋭く浮き彫りにしていることが確認される。

第三章「怒り狂う老人としての『ドン・キホーテ』—大江健三郎『憂い顔の童子』」は、大江健三郎の『憂い顔の童子』が、バフチンの『ドン・キホーテ』論を媒としてドン・キホーテを英雄視する解釈とは一線を画していること、『ドン・キホーテ』後篇の自己言及的な構造と重ねあわせうる形式上のパロディとしての性格を有すること、「怒れる老人」（イェーツ）として奮起するドン・キホーテのイメージに力点が置かれていることを論じる。このような点から『憂い顔の童子』は『ドン・キホーテ』の非ロマン主義的受容の好例であるとされるのである。

以上の各章を通じ、『ドン・キホーテ』の原典テキストが適宜参照され、『ドン・キホーテ』の作品解釈にたいに論及がなされる。結論として指摘されるのは、アメリカ現代小説と日本の現代小説においては、『ドン・キホーテ』のロマン主義的解釈は必ずしも優勢ではないこと、探求する個人としてのドン・キホーテ像が強く表れるアメリカ現代文学に対し、日本の現代文学ではドン・キホーテとサンチョに対応する二人組のモチーフが温存されるということである。

以上のようにまとめられる本論にたいし、審査委員からは、受容史を重要な分野とする『ドン・キホーテ』研究として一定の貢献をなしていること、とくに日本文学に関する部分は先行の業績がないという点で重要な研究たり得ていること等、評価する意見があった。一方で、アメリカ現代小説と日本の現代小説を並列的に論じ、章ごとの議論の積みかさねに乏しい構成の弱さ、作品の時代的文脈への配慮の不足などを指摘する意見もあった。作品選択の基準、日米の現代小説が対比されることの意味を明確にすべきではなかったか、そもそも『ドン・キホーテ』のロマン主義的解釈とはどのようなものなのか、より掘り下げて論じるべきではなかったか、といった指摘もあった。ただし、これらは本論の学術的価値を本質において損なうものではないことも、審査委員の間で確認された。

以上の判断により、本審査委員会は、田中有美氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。